

No. 2 名馬でたどる 千代田牧場 by 有吉正徳

ニッポータイオー

父 **リフオー** 母 **チヨダマサコ**
1983-2016

同レースの最大着差として今も健在だ。

ニッポータイオーはただ単に速だけのマイラーではなく、宝塚記念(2200m)で二度2着になったように距離もこなした。スピードに恵まれた中距離寄りのマイラーといえそうだ。

ニッポータイオーは1983年4月21日、千代田牧場で誕生した。2023年は生誕40周年に当たる。父は英国産のリフオー。凱旋門賞馬ダンシングブレーヴなどで知られるリファール産駒だ。フランスのGⅢクインシー賞(芝1600m)を勝ったぐらいの実績しかなかったが、種牡馬としては優秀だった。

現役を引退後の1979年にアイルランドで種付けし、その年に日本に輸入された。欧州に残してきた産駒の中に大物がいた。牝馬のロイヤルヒロインは米国でブリーダーズカップマイルをはじめGⅠ3勝を挙げた。牡馬のトロメオは日本の皐月賞に当たる英2000ギニーで2着になった後、8月に米国に遠征。GⅠバドワイザーミليونに出走して、伝説の名馬ジョンヘンリーをクビ差で破る金星を挙げた。この活躍によりリフオーは日本で4年間種付けした後、米国にトレードされた。

リフオーの日本での活動期間は短いものだったが、1987年はニッポータイオーやアイランドゴッテスなどの活躍により、中央競馬の種牡馬別成績でノーザンテーストに次ぐ2位にランクインした。

ニッポータイオーの母チヨダマサコは厩舎に入厩して40日ほどで新馬戦に優勝する実力馬だったが、骨盤骨折という故障に泣き、5戦1勝の成績で現役を引退し、繁殖牝馬になった。1982年、サンプリンスとの間に産んだ初仔が牝馬のスリードーターだった。翌年、リフオーとの間に産んだ2番仔がのちのニッポータイオーである。

ニッポータイオーの母系について、少しさかのぼらなければならない。母チヨダマサコの祖母はワールドハヤブサという1967年生まれダイハード産駒だ。ダイハードは2世に旧8大競走の勝ち馬こそいかなかったが、母の父として好結果を出した。フジノパーシア、スリージャイアンツが天皇賞・秋を制し、ハードバージが皐月賞で優勝した。生産地では、ダ

イハード牝馬が求められるようになった。

ダイハードを父に持つワールドハヤブサはまた名牝系の出身でもあった。その母オーハヤブサはオークス馬であり、さかのぼれば、1907年に小岩井農場が英国から輸入したビューチフルドリーマーにたどり着く。ビューチフルドリーマーを基にした牝系からは三冠馬シンザンやダービー馬タケホープなど数多くの名馬が誕生していた。

そんな良血のワールドハヤブサを買わないかという話がきた。かなりの高額だったが、場主の飯田正(現社長・飯田正剛の父)はその血統には魅力を感じ、購入を決意した。蹄骨骨折の重傷を負っていたことは、購入後に知ることになる。牧場では四肢に負担がかからぬよう、柵場を利用して馬体をベルトで吊って保定していた。治療の甲斐あり、次のシーズンには種付けすることができた。

ワールドハヤブサの代表産駒といえば、1979年にファバージとの間に生まれた7番仔、ビクトリアクラウンだ。1982年のエリザベス女王杯など重賞4勝を挙げた名馬である。1981年にはJRA賞最優秀2歳牝馬、1982年にはJRA賞最優秀3歳牝馬に選ばれた。ビクトリアクラウンを送り出す前に、ワールドハヤブサが1973年に産んだ初仔が牝馬のミスオーハヤブサだった。

ミスオーハヤブサは未熟児で生まれたため、競走馬になることはできず、そのまま繁殖牝馬になった。そして1977年、ラバージョンとの間に産んだのがニッポータイオーとタレントイドガールの母になるチヨダマサコだった。米国から輸入されたラバージョンは日本で3年しか供用されず早死にしたが、飯田正は高く評価していた。チヨダマサコ、千代田牧場のマサコとは、飯田正の妻・政子のことである。

1985年、2歳になったニッポータイオーは美浦の久保田金造調教師に預けられた。10月の東京競馬場でデビュー戦を迎える。不良馬場の芝1600mを1分38秒9で走り切った。2着とは2秒2もの大差がついていた。だが2戦目の万両賞は7着に終わった。

3歳初戦は当時、距離1600mで行われていた京成杯。逃げたダイナフェアリーを捉えられず2着に終わったが、のちに皐月賞で優勝する3着のダイナコスモスには4分の3馬身差をつけた。弥生賞は3着となり、皐月賞に挑んだが、大外の21番枠が響き8着となった。ダービートライアルのNHK杯で巻き返しを狙ったが、またしても8着に終わる。弥生

賞、皐月賞、NHK杯と2000mの距離で3連敗すると、久保田調教師はすっぱりとダービーをあきらめ、短距離路線を選んだ。

ニュージーランドT4歳Sは当時、ダービーの前日に東京競馬場の芝1600mを舞台にして行われていた。2番人気に支持されたニッポータイオーは好位から抜け出し、2着のダイナフェアリーに3馬身半差をつけて重賞初制覇を果たした。その後もラジオたんば賞(2着)、函館記念(1着)、毎日王冠(2着)、スワンS(1着)、マイルChS(2着)と連対を続けた。この年、1986年はまだ天皇賞・秋が3歳馬に開放されていなかった。開放されたのは翌1987年。条件変更があると1年早ければ、ニッポータイオーの現役生活も違う形になったのかもしれない。

4歳時は京王杯スプリングC(1着)、安田記念(2着)、宝塚記念(2着)、毎日王冠(3着)、天皇賞・秋(1着)、マイルChS(1着)と6戦3勝、2着2回、3着1回とすべてのレースで馬券圏内に入っ

てみせた。5歳時は京王杯スプリングC(2着)から安田記念優勝に結びつけ、宝塚記念ではタマモクロスの2着になった。このレースが現役最後のレースになった。1988年10月9日、東京競馬場で引退式が行われた。

翌年からレックススタッドで種牡馬活動を始めた。12シーズン種付けを行い、インターマイウェイ(大阪杯、函館記念)、ダイタクテイオー(毎日杯)の2頭のJRA重賞勝ち馬を出したが、自らに並ぶGⅠ馬を送り出すことはできなかった。種牡馬引退後は浦河町のうらかわ優駿ビレッジ「AERU」で余生を送り、2016年8月、老衰のため、その生涯を閉じた。33歳の長寿だった。

ワールドハヤブサの骨折や未熟児だったミスオーハヤブサを立ち直らせ、繁殖牝馬として成功させた。「馬よりも先に人が諦めてはいけぬ」という千代田牧場の執念と熱意のたまものといえよう。切れかけた糸をつむいだ結晶がニッポータイオーだった。

有吉正徳(ありよし・まさのり)1957年1月、福岡県出身。1982年、東京中日スポーツで競馬記者デビュー。1992年に朝日新聞に移る。ミスターシービー以降、コントレイルまで6頭の三冠馬を取材。2022年に定年退職し、フリーの競馬ライターに。著書に「2133日間のオグリキャップ」「第5コーナー〜競馬トリビア集」。朝日新聞金曜夕刊「有吉正徳の競馬ウィークリー」は連載20年。週刊競馬ブックで「一筆啓上」、JBBAニュースで「第5コーナー」を執筆。